

令和5年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会（概要）

日時 令和6年2月14日（水）13：30～17：45

場所 かながわ県民センター11階 コミカレ講義室2

■ 開会

（かながわ県民活動サポートセンター基金事業課長から本日の予定を説明）

- 中島会長が欠席、委員7名で開催。
- 会議の流れを説明
 - 13時30分～14時30分 事前確認
 - 14時40分～16時05分 令和6年度ボランティア活動補助金（新規）のプレゼン審査
 - 16時15分～17時15分 プレゼン審査に対する選考
 - 17時15分～17時30分 令和6年度協働事業負担金の最終選考
 - 17時30分～17時45分 NPO支援策の充実強化について事務局報告
 - 17時45分 閉会

（審査会長職務代理より開会の宣言）

- 令和5年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開会する。
- 率直な意見交換を通じて公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当することから非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項1 令和6年度ボランティア活動補助金事業（新規）の対象事業選考

（事務局から以下について説明）

- ボランティア活動補助金事業の応募状況（資料1）
- 来年度のボランティア活動補助金事業に係る予算（資料2）
- 審査委員と利害関係のある団体からの提案なし
- 事務局からプレゼン審査対象団体の申請概要及び幹事会事前調査結果について報告（資料3、4）

（委員による審議）

- ボランティア活動補助金への申請事業に係るプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

（プレゼンテーション審査の実施）

- ボランティア活動補助金の申請事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。なお、傍聴は会場での参加とした。

【政令市を含む神奈川県内の認知症支援基盤の強化を図る事業】

神奈川オレンジネットワーク（以下「オレンジネットワーク」という。）によるプレゼンテーション実施。

<質疑>

（山岡委員）

効果のところでも説明があったが、申請書でも自治体間を跨いだ交流あるいは地域間格差の解消と記載がある。この事業は、シンポジウムや事例報告会、カフェ学会があり、情報発信の事業になると思う。ただ、情報を発信するだけでは交流の促進や格差の解消には繋がらないように思うが、それを促していくために、どのような工夫をしているか。

（オレンジネットワーク）

この大きな事業の柱は、昨年4月10日の設立総会時に作ったプランで、会員間の情報共有を促進するために、事例発表と意見交換会、神奈川カフェと名付けているが、年2回実施する。アンケートにもあるが、15分ぐらいの発表では足りず、もっと聞きたいという回答があるので、参加された会員の皆さんと、情報を共有していきたい。

また、先進的な取り組みをしているところの事例は、どうしてそれができるのかというものが多。そのため、こういうのがポイントであるという話も交えていただいております、それにより気持ちが高揚され、自分も、もう1歩踏み込んでみよう、あるいは、社会資源がなかったところができる、ということが起きてくる。

（山岡委員）

認知症の正しい理解を広め、偏見を解消するという目的だが、同じ目的で活動している団体も既に多くあり、県域で活動しているものもあると思うが、オレンジネットワークでやろうしている活動との大きな違いはどのようなところか。

（オレンジネットワーク）

例えば、認知症の人と家族の会神奈川県支部の代表者が、当会の理事、顧問になっており、会員の方向けのサービス、行政から委託を受けた電話相談なども行っているが、彼らの守備範囲を超えた地域連携を作っていく。地域活動という点では、家族の会のさまざまな行事も、古い付き合いなのでよく承知しており、それをさらに促進させるような、双方が良い点を発展させるようなことに繋がっていくと期待している。

（山岡委員）

今回の提案では、講演会、シンポジウムと活動実践報告会、認知症カフェ学会という3つあるが、この3つの活動の関係、3つをやることの価値や相乗効果をどういう風に考えているか。活動実践報告会も学会も、どちらも事例報告であり、同じような性質と感ずるので、3つを行う理由を説明願いたい。

(オレンジネットワーク)

3つそれぞれに特色があり、啓発活動は、主に行政の活動に協力し、連携していくことがポイントになる。実践報告会は、地域ごと、独自に取り組まれているアクティブな活動が多い。

カフェ学会は、カフェは部屋を間借りするのが一般的だが、その部屋を居場所として活用しようという取組なので、どちらかというと、人がそこに入ってくるというイメージ。

ただ、中々そこに人が来てくれなくて、困っているところも非常に多い。認知症になっても、認知症の人の集まる場所には行きたくないという人も多い。そういうカフェをどのように活性化させていくか。また、コロナ禍でカフェがかなり減少したと言われており、それを、再発生させていくには、今までのやり方だけでは足りないなので、いろんな実践報告を聞いてもらい、自分たちのポジションを再確認し、新しい動きを作ってもらいたいと思っている。

(山岡委員)

事業3は、カフェ活動に関する実践報告ということか。

(オレンジネットワーク)

そうである。

(山岡委員)

事業1以外の事業2と3は、既に行われている。今回、補助金を得て実施することで、これをどのように発展、展開していこうと考えているのか。

(オレンジネットワーク)

申請した時点で、会員が25人であり、そのうち10人ぐらいは会費が未納付だったので、会議予算はほぼなく、当初は、報告してくれた人に、謝金なり人件費を支払うということだったが、団体が走り出したばかりで不安だったので、そういう費用は一切含めず、自分たちの身の丈で勝負しようとスタートした。

9月に講演会があり、12月に実践報告会、1月20日にカフェ学会があった。それを経て、50人と会員が増えており、この予算書の予測の人数が50人なので、すでに到達している。来年はおそらく80人から90人に会員が増えると思っており、その会員間の情報共有の仕方をしっかり私たちがコントロールする。しっかり情報を投げていけば、地域の支援力がさらに高まり、資源が生まれていくのではないかと期待している。

(峯尾委員)

2017年の実行委員会で皆が集まり、それがきっかけで団体ができたとのことだが、その時の実行委員会は何人くらいだったのか。

(オレンジネットワーク)

最初は、15人位でスタートしたが、3年ぐらいの間に25人になった。コロナ禍があり、

活動がほぼ休止状態となった。2022年のシンポジウムも評判は良かったが、参加率はかなり落ち、このままでは良くないとなり、当時の実行委員の中の有志の人たちで、新たなグループを立ち上げた。

(峯尾委員)

会員25名はその時の会員ということか。

(オレンジネットワーク)

そういうわけでもない。入れ替わりもある。

(峯尾委員)

活動内容の2つ目の確認だが、認知症地域支援活動実践報告会は、各市町村に義務付けられている認知症の地域支援推進員活動のことか。

(オレンジネットワーク)

違う。認知症地域支援活動実践報告会は、地域支援推進員と地域支援の言葉が被っているだけで、任意のグループの活動のことである。

(峯尾委員)

3番目の認知症カフェ学会の活動も事業2の活動と被るということによいか。

(オレンジネットワーク)

被らない。認知症カフェは、今年、私が名簿化したところでは、県内に317のカフェがある。認知症カフェと認知症の実践活動をしている人たちは、両方行っている人もいるが、認知症の人と一緒に散歩したり、カフェとは違うスタイルで取組むとか、認知症サポーター養成講座を独自に展開したり、地域で様々な実践が行われている。認知症地域支援推進員や地域包括支援センターが直接関与していないものもある。地域で様々な活動があることがわかり、今に至っている。

(峯尾委員)

当事者は団体の中にいるか。

(オレンジネットワーク)

1名だけいる。

(峯尾委員)

地域間格差についてだが、具体的にどこと、どこというのはあるか。

(オレンジネットワーク)

具体的に調査やデータがある訳ではない。

(峯尾委員)

原動力の強いところとそうではない地域があると理解した。

あと、会員同士がメールや SNS で繋がり、情報交換をするとあるが、それには、一般の人達や当事者や家族も含まれるのか。

(オレンジネットワーク)

含まれる。当事者と繋がっている人たちばかりである。

(山岡委員)

収支予算書について説明するとのことであったが追加であるか。

(オレンジネットワーク)

予算の部分で説明していなかったが、当初はもっと大きな金額を見込んでいたが、スリム化した。全員ボランティア参加とし、医者もボランティアで参加することとした。

【高齢農家支援・地域福祉増進事業の拡大】

NPO 法人 lagraine ラグレーヌ（以下「ラグレーヌ」という。）による プレゼンテーション実施。

<質疑>

(尹委員)

団体調書の中で、現在の構成人数が、役員が 4 名、個人会員が 14 名、計 18 名とあるが、このうち、実際に活動を中心と担って動けるのは何名程度か。

(ラグレーヌ)

1 回の収穫に連れていける方は、私の車の助手席しか乗れないので、連れていき現場で作業するので、1 回に 3 名から 4 名、手伝いがいる。毎回同じ方ではなく、都合が良い方に来てもらっている。

(尹委員)

その状況だと、例えば、補助金に採択されたとして、3 年経っても状況を変えるのが、中々難しいのではないかと思うが、それについてはどう考えているか。

(ラグレーヌ)

生産支援販売農家を増やしていくことで、収入面を増やし、さらに、他の事業でイベント事業を、今年から新しく計画しており、3 年以内に、事業自体を太くすることで、土台を作っていこうと思う。

(尹委員)

この事業に参加している農家の数は 8 軒でよいか。直近の 1 年間程度で野菜販売の実際

の金額はどのぐらいになるのか。

(ラグレーヌ)

予算書に記載があると思うが、売り上げの8割相当となるので、これから全体の計算ができると思う。

(尹委員)

具体的に数字をいただけるか。

(ラグレーヌ)

240万円位になると思う。

(尹委員)

1年間の農家から預かった野菜を売った金額が240万円という理解でよいか。

(ラグレーヌ)

このうち8割は返金している。

(尹委員)

8軒から預かった野菜の全部の売り上げをトータルすると1年間で240万円程度と理解したが、それでよいか。返金分を含めず、その場で売って得られた収入は240万円位だったということによいか。

(ラグレーヌ)

8割返金しているため、全体の売り上げは40万円程度だと思う。

(尹委員)

昨年夏にボランティアを応募したところ、無償ボランティアは1人も来なかったという発言があったが、来なかった理由は何か。

(ラグレーヌ)

無償ボランティアで、農家作業があまり魅力的ではないかもしれない。もっとこんな野菜を持ち帰りできるなどの魅力を出せば、目に止まったかなとは思う。野菜なので、食べてもらわないと魅力が伝わらない。無償ボランティアを見知らぬ方に募集するより、自分たちの客を無償ボランティアにした方がいいと思っている。

(尹委員)

補助金を採択された場合、それで人件費負担が軽減されるという記載があった。

ただ、補助金自体の性格が、そもそも活動のための人を担保するために使うというのではなく、補助金で人件費を賄えるようになれば人は増やせるという考えがあるのであれ

ば、本来の趣旨とは異なると審査会としては判断するのだが、それについてはどのように考えるか。

(ラグレーヌ)

今、一番必要なのが、農家を増やすということだと思う。野菜の種類や量が多くあると、売る方も買う方も喜ぶ。農家を拡大するためには、私が、その開拓に時間を費やしたい。

(尹委員)

現時点で、人手が足りない状況でさらに農家を増やすというのは非現実的なのかなと思ったが、それについては、いかがか。

(ラグレーヌ)

現在、私の住まいが大和市で、愛川町に作業所があるので、そこに行き、大和に戻って販売をしている。数年の間に、愛川町に引っ越す予定なので、スタートの地点が近くなる。それまでの見込みで考えている。

(尹委員)

補助金終了後の展望について、会費収入と事業収入で大まかなものは賄っていける体制構築を目指すという記載がある。会費や、事業収入、人員体制は大体何名程度でいくら位など、数値的なものはどのように考えているのか。

(ラグレーヌ)

予算書にある6名体制は、大きく変わらないと思っている。無償ボランティアが現時点でいるので、経費はあまり変わらないものと考えている。あとは、事業の柱を一つ増やし、イベント事業などにより、賄っていける見込みは立っている。

(為崎委員)

今の質疑応答の中でも、かなりたくさんさんのテーマにチャレンジしようということがわかった。それは素晴らしいのだが、段階的に、初年度はここを固め、2年度目にこう広げ、3年度目にこうやるといったようなステップを踏んでやるというようなことは、考える余地はあるか。

(ラグレーヌ)

この事業の難しいところだが、例えば、開拓を今年度強化する、逆に、販売先を強化する、そうするとバランスが崩れてしまう。野菜ばかり増えてしまい、余ってロスとなる。逆に販売先ばかり増えても、販売するものが無いとなる。均整のとれた事業の展開をしていかなければならないのがこの事業である。

(為崎委員)

逆に、農家の数や販売先の数を増やさないで、今ある先だけを使い、とにかくがっちり

とその収益や採算が取れるような仕組みを構築するというのは難しいか。

(ラグレーヌ)

謝金を多くかけたいという考えがある。野菜は薄利である。ただ、神奈川県の中の農業を変えたいというところに関しては、活動していきたいという思いはある。本当は、無償ボランティアが集まってくれば、今回、応募することはなかったのだが、中々無償では集まりづらいため、有償ボランティアを募集し、PRをしっかりとやっていこうということで応募させていただいた。そのため、経費の部分に関しては、新しい柱を作り、太くして支えていくという体制の構築は必要になってくるので、色々なものに着手していく必要性はあると思っている。

(為崎委員)

代表がすごく熱い思いを持たれているので、そこに共感して同じレベルで動いてくれる方の開拓がないと事業の拡大は厳しいかなと思った。今、ボランティアで関わることによって、金銭以外で得られるものは何か。

(ラグレーヌ)

野菜のB級、C級品を喜んで持って帰っていただいている。また、皆さん、土に触れることをすごく喜んでいる。私は毎回のことなので、なんとも思っていないが、ボランティアの人は、人参を引き抜くことがすごく喜びに感じているようである。

(為崎委員)

将来の展望で、就農する方を養成していくという記述があるが、高齢の方を就農に導くことは、かなり大変だと思うが、その辺りについてはどうか。

(ラグレーヌ)

昨今、若い方で農業に興味を持っている方が多い。団体のイベントでも、芋掘り体験や、焼き芋大会などを実施している。そこで、農家とも話をしていて、農業に興味を持ち、余った畑はないかと、一歩踏み出してくれれば、万々歳かなと、思っている。

【近隣住民が世代を越えて集える交流の場を提供する事業】

特定非営利活動法人コミュニティーサロン釜利谷ふれあいカフェ（以下「ふれあいカフェ」という。）による プレゼンテーション実施。

<質疑>

(石田委員)

年配の方の働く場所をという話があった。また、ボランティアの方も70歳から83歳で12名ということだが、12名全員が70歳以上ということか。

(ふれあいカフェ)

自分含め、70歳以上で、すごく活躍してくれている。高齢者は、働く場があるということでは、元気になり、生き生きした人生が送れる。それが最初の目的だったので、そういう仲間を募っている。最高は、83歳の人もいる。

(石田委員)

今後、補助金を受けて事業を実施するにあたり、ボランティアを増やしていくという考えはあるか。

(ふれあいカフェ)

ボランティアは、ホームページで募集しており、時間当たり100円を支払い、お昼は食べられる。1人でも多く参加し、生き生きした人生を送れるといいなと思っている。

(石田委員)

70歳以上の方を限定で募集する、ということではないということか。

(ふれあいカフェ)

若い方で、60代、50代の方もいる。最近ホームページから入ってきた。また、看護師の方などもいるが、64歳の方が1番若い。あとは70歳以上である。

(石田委員)

今実施しているのが、体操や歌声喫茶、食事配膳、カフェの事業であるが、こうした事業は、基本的にはお年寄りを対象とした事業か。

(ふれあいカフェ)

うちの弁当を食べた人は、お年寄りも多いが、以前からのお客さんも多く、弁当も全部手作りである。体にいい料理のため、その料理を食べると元気になる。1回食べた方は、必ずまたお弁当の注文してくれる、そういう感じである。

(石田委員)

先ほど60代で若いという話だったが、それよりもっと若い方を集めるとか、対象とするという考えはあるのか。

(ふれあいカフェ)

本当は、若い人が欲しい。後継者も考える必要がある。ただ、若い方は時間当たり100円では難しい。そのため、働く場のないお年寄りたちに働く場を提供し、元気な人生を送っていただきたいという思いである。

(石田委員)

目的の中で、世代を越えた交流という記述があるが、若い方を集め、働いてもらうよう

な工夫はあるのか。

(ふれあいカフェ)

若い方も来ていただければ、雇用してみたい。

(石田委員)

雇用するのに、何か、アイデアや考えとかはあるか。

(ふれあいカフェ)

ホームページで全部説明しており、それを見て、来てくださる方は、一応面接をしている。また、学生を仲間に引き入れようと思っている。大学生のため、4年間したら卒業するが、協力してもらっている。

(石田委員)

学生は近場の学生か。何名くらい協力してもらっているか。

(ふれあいカフェ)

そうである。10名くらいである。

(石田委員)

学生とお年寄りとは年齢でかなり間が抜けてしまうが、その間の20代から50代ぐらいの方は、中々来てもらえないということか。

(ふれあいカフェ)

若い方は外に行けば給料をもらえるし、難しいかと思うが、来てくれる方は歓迎する。20代から50代位までの方で、お客さんで来てくださる方にも声をかけているので、もう少し増えるかもしれない。

(石田委員)

地元の方が利用されていると思うが、地域の関係団体や区役所との連携はあるのか。

(ふれあいカフェ)

地域ケアプラザに相談したりしている。

(石田委員)

例えば、シニアクラブ、老人会や役所でのイベントをやる中で、団体がやっているような健康体操などを実施しているのではないかと思う。そこはどのような調整をしているのか。

(ふれあいカフェ)

ケアプラザはケアプラザの方法でやっており、3ヶ月に1回ぐらい、音楽を提供しており、シニアの方たちは、電車に乗って音楽を聞きに行く機会がないため、少し贅沢なコンサートを実施している。

(石田委員)

他の自治会や老人クラブとの連携はあるか。

(ふれあいカフェ)

団体のボランティアに民生委員が数名いる。そういった方々と協力して、お弁当を頼んでもらったりしている。

(石田委員)

6年度から8年度の補助金について、微増はするが、予算の動きがない。これは、補助金を受けて、少しは増えるが、なくなるとまた元に戻るということか。

(ふれあいカフェ)

令和4年の10月からスタートしたが、正式な営業開始が、横浜市建築局の用途変更の許可が4月まで取れなかった。その間はほとんど、開店休業的な感じであり、その間の、累損が約200万円位、初期投資も含めてあり、まずそれを健全な財務状況に戻したい。補助金をもらえれば、それを一部に充てたいと思っている。

昨年の4月から今年の3月までは、大体50万円位の赤字になってきている。認知度があがり、お客さんが増えれば、来年度には、なんとかなると予想を立てている。

(石田委員)

損失分を補填しながら補助金を活用して、増収を図ろうということか。

(ふれあいカフェ)

そうである。

(田中委員)

予算配分の大きい事業3の配食について伺う。人件費もそうだが、食材費も170万円と大きな額を計上されている。これは現在400食を配食しているとのことだが、現在の分にも回す分なのか、それとも、次年度以降、この補助金期間に拡大する分、400になったり600食になったりする時に回す分なのか。

(ふれあいカフェ)

食材費は、最初売り上げが少なく、現在、原価率が40%ぐらいまで、下がっている。

内のボランティアに、青果市場に勤める方がおり、不要になった野菜などをかなり利用させてもらっている。売り上げは、今年度からもう少し増える予定でいる。

(田中委員)

事業として考えた時、配食の食材費ぐらいは受益者負担でいただいてもいいと思うが1食あたりの原価や受益者負担の額など、現状を聞きたい。

(ふれあいカフェ)

原価が4割とすると、1,000円のものが400円から500円で、そのくらいは人件費や家賃に回る感じである。

(田中委員)

配食の部分は、収益が求められる部分として考えて大丈夫と理解した。

ふれあいカフェの特徴で、県の補助金を受けるとなると、他の団体も参考にできるモデル性や新規性も欲しい。自立化に向けた新規事業計画の資料の中で、大学生を巻き込むとか、新たなイベントが新規性になると思うが、これらが収益確保にどう繋がるか。

(ふれあいカフェ)

普段のイベントは800円で実施している。パン教室は500円が参加費で300円が食事代、民間からはあまり取れないと思っており、赤字覚悟で出している。参加費込みで800円もらい、講師に300円、200円だけ団体に入るという感じである。

3ヶ月に1回の大きなコンサートは、プロの方たちを呼ぶのに、3,000円から4,000円かかるが、お年寄りや遠くまで行くことができない方たちが来られるので、それも多少は利益が出る。そういう感じでやっている。

【持続可能な障害者スポーツ活動のための人材育成と理解促進事業】

特定非営利活動法人 Fun Place 39 (以下「Fun Place 39」という。)による プレゼンテーション実施。

<質疑>

(田中委員)

説明にあった人材プログラムの案で、人材確保していくとされているのは、団体内部にいらっしゃる方の人材のスキルアップになるのか。それとも、外部の方たちも含めて対象にしていくものか。

(Fun Place 39)

現在の内部のスタッフは、これまで10年以上一緒に活動している方たちである。

大きな事業として、放課後デイサービスを開放しており、福祉事業を始めた時に多くの方が、一緒に働きたいと言ってもらい、1人ずつ増えていったが、重い障害の方にも来てくださいますという場を提供できなかった。そこを、外部の方に対しても、しっかり受け入れ体制を構築していきたいと考えている。

(田中委員)

ここで育成された人材は、主に団体の中で活躍するのか、それとも、他の団体や他の現場でも活躍されるのか。

(Fun Place 39)

地域の中で、こういう方が1人でも増えていき、私たちの団体だけではなく、こういう団体が少なく、場所がないのだが、場所がもっと広がれば良いと思っている。

(田中委員)

令和6年度にこの自主プログラムを行い、令和7年度から、認定制度を作られるということだが、令和6年度に行われる内容と7年度以降の認定制度は別のものになるか。

(Fun Place 39)

現在は、初めてこういうものをやりたいと思っている。今までやった経験をノウハウとして、作ってきた。これを広く、皆さんに知っていただくことが申請事業の目的なのだが、来年度、作りながら、レベルを上げていければと思う。まだ初めてのことなので、これからチャレンジしていきたいと思っている。

(田中委員)

このような認定制度が必要ということは、皆さんの経験の中から必要だということもあるが、他の団体等を含めてパラスポーツに関わる方々が、今後、多く取得していく制度だと思う。こういった認定制度へのニーズは、寄せられているものなのか。

(Fun Place 39)

現在ある、県の障害者のスポーツ指導員の資格制度が、それぞれの種目で、協会や連名などの認定制度になっている。それはとてもハードルが高く、現状は、パラリンピックに出場するレベルの方々が、多くいるのが現状である。

当団体は、パラリンピックに出るメンバーもいるが、重度の障害の方の居場所を作るところが、最初のきっかけのため、そういう方々に関わる機会がないのが現状である。そこに関わっていただくことで、共生社会にも繋がると考えている。

(田中委員)

既存の認定制度の隙間、それでは足りてない部分ということか。

(Fun Place 39)

そうである。

(田中委員)

認定制度を作った時、申請費用や、年度ごとの更新料や登録料などが必要になると思う。これらを団体の事業継続のための収入源の1つにしていくという考えはあるか。

(Fun Place 39)

障害者のスポーツ指導者の現状は、ボランティアでしか担い手がいないというのが課題である。だから人が増えないという面もあるので、レベルを上げていかなければいけないというところでは、しっかり、それに見合った対価や設定を検討していきたい。

そこは、色々皆さんに教えていただきながら、正しい金額設定をしていきたい。

(田中委員)

車両費として計上されている部分が結構な金額があるが、これは本事業のどういった目的で使われるのか。

(Fun Place 39)

私たちが主に活動しているのは、横須賀地域の公共施設を使い、広く一般に、ありのままの障害者の活動現場を見ていただくため、横須賀のプールや運動場を使っている。

横須賀は広く、山や坂が多く、公共プールがあちこちにあるが、この事業で行う場所が山の上であり、そこに通うには、車がないといけないため、車両費を計上した。

(田中委員)

本事業に使われるということで理解した。

(高村委員)

人材育成の計画ということでご提案いただいているが、この中には指導者養成と、ボランティア養成の記述がある。これは、別々にカリキュラムなどがあるのか。それとも一緒に講座などを受けるのか。どのような形を考えているのか。

(Fun Place 39)

現在も、この事業の中で、指導者と、ボランティアで見守りスタッフとして、構えている。やはり、そのスポーツに特化した指導員は、しっかり指導者として、認定制度もそうだが、既存の県の指導者制度も、指導者としてのスキルを上げてもらえるような設定である。

ボランティアは、水泳に関わりがない方でも、水の中に入ってもらい、支援していただける方も多くいる。指導者よりも実は多くいる。そこで、障害者に触れ、スクールの授業の中に一緒に入っていただいている。

(高村委員)

計画の中の、18回の中に含まれているのか。内訳やイメージなどを教えてほしい。

(Fun Place 39)

そこは、3人の中で、指導者が入ってきたら、指導者が1人だったり、ボランティアが2人など、ざっくり3名である。

(高村委員)

種目としては、水泳と陸上が記載されていたと思うが、話を聞くと、重度の方を対象にしていることで、細かく種目を分けていないのかもしれないが、水泳も多種目あり、陸上でも多種目ある。どういうエリアで、どういうカリキュラムを考えているのか。

(Fun Place 39)

現在あるカリキュラムの中に、入ってもらおう。

具体的には、水慣れレベルの重度クラス、軽度障害も一緒に入っているが、重度の方でも、1人に対して、1人ついていただけると、安全に水の中でサポートができる。

現状は、スタッフが3名と計上をしているが、1回に10人来てもらっている。5人、5人で、水慣れクラス、育成クラスと振り分けをして、支援していきたい。

(高村委員)

3年間の計画の中で、指導認定制度を整備していくことになると思うが、資格で考えると、例えば初級、中級、上級のような、作り方もあるかと思う。何か計画や構想はあるか。

(Fun Place 39)

当事者として、競泳経験はあるが、現在の県の障害者スポーツ指導員は、初級、中級、上級があるが、まだ設定は考えていない。

共生社会っていうところでは、関わっていくと、障害属性もしっかり分かってもらうことを考えており、団体の認定制度を指導者、ボランティアと、それぞれ作り、そこからスタートさせたいと思っている。

増えていき、レベルが上がってきたら、上級、中級と設定していければと思う。

(高村委員)

まずは基本のところを作っていくということで、よろしいか。

啓発や人材育成のために、この制度の計画をされているのかもしれないが、予算書には、カリキュラムを作るための予算が含まれていないように思われる。その辺はどのように考えているか。

(Fun Place 39)

カリキュラムは、団体の活動が10年で、その中で同じカリキュラムでやらせてもらい、それぞれのレベルに合わせたものが出来上がってきた。

今ある事業の中に、認定制度、人材育成をできる場所を作るところで、この申請としているので、カリキュラムは現状のもので、団体に入会したいという利用者が、現状、待機者も含め、60名程度いる現状である。そういう方たちを1人でも多く受け入れ、1人でも多くの方が支援できるようになればと思っている。

(高村委員)

10年間やってきて、カリキュラムも団体で構築されているとのことだが、外部講師を含め、同じような障害のある方たちのグループとどのような連携を取っていくかなどの考えはあるか。

(Fun Place 39)

10年を通して、関わりが増え、他団体と一緒に記録会を作ったり、イベントをしたり、そういうお話がすごく多くできてきた。

なので、団体の中でだけにとどまらず、こういうことをきっかけに、少しでも興味を持ってもらえる方が増えていただければと思う。そういう方が増えないと、当事者たちの場所は作れないと思っている。

(委員による審議)

○ ボランティア活動補助金事業（新規）の申請事業に係る公開プレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、事業を選考した。

※ 選考結果は後日団体に通知。

■ 審議事項2 令和6年度協働事業負担金の対象事業選考

(事務局から令和6年度協働事業負担金協議結果について説明(資料5))

○ 県協働部署との協議結果を受け、来年度実施する事業を選考した。

■ 報告事項 NPO支援策の充実強化について

○ NPO支援策の充実強化について、事務局から報告を行った。(資料6)

■ 閉会

(審査会長職務代理より閉会の宣言)

○ 令和5年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

(以上)